小学校における教科担任制の導入

野　木　　雅　生

１　テーマについての考察

中央教育審議会は２０２１年１月２６日に，「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」を答申しました。その答申では，小学校高学年の外国語・理科・算数への教科担任制の本格導入が挙げられました。メディアでも，小学校の教科担任制が大きく取り上げられることが多々あり，児童生徒や保護者からの関心も高まっていると感じています。しかし，国の方針の決定があったから，小学校において「教科担任制」を導入するという形だけでは，教科担任制を導入する効果が低くなるのではないかと考えます。「教科担任制」を導入することで，学校教育をより良くするためには，教師一人一人が「教科担任制」の意味をしっかりと考える必要があると考えます。

そこで，私は今回レポートをまとめることで，自分自身の「教科担任制」についての考えを深める機会とするために本テーマを設定しました。

２　「教科担任制」の導入によってもたらされる効果

（１）質の高い専門性のある授業展開

２０２１年の中教審の答申では，専科制を導入する教科として，外国語・理科・算数が例示として示されています。これは，教科担任として導入しやすい教科という理由や専門性が発揮される教科だからという理由があるのではないかと考えます。つまり，教科担任制を導入することにより，教師がもっている専門性や資質を授業に発揮することができるとともに，専門教科の教材研究を十分に行うことができ，児童にとって魅力ある授業展開ができていくのではないかと考えます。

（２）児童が様々な価値観との出会いの実現

「学級担任制」の良さの一つとして，１人の学級担任が継続して児童の成長の様子を見取り，深い児童理解ができるということが挙げられると考えます。そのため，文部科学省も低学年及び中学年の教科担任制については示していません。

しかし，発達段階が上がるにつれて，児童も様々な出会いや経験の中から自分の「考え」や「価値観」を形成していく姿が見受けられます。児童が「考え」や「価値観」を形成する際には，多様なモデルが身近にあった方が，児童の可能性が広がると考えます。学校には，様々な教師が存在していて，教師一人一人の生き方や考え方には相違点があります。学級担任一人の価値観だけではなく，学校生活の中で様々な教師とより深く関わることで，多様な考えをもつことができるのではないでしょうか。多様な考えをもつ一つの方法として，「教科担任制」が効果を発揮するのではないかと考えます。また，「教科担任制」を導入することで，より様々な教師と

触れ合うという経験を小学校高学年から行うことで，円滑な中学校への導入になるとも考えます。

（３）働き方改革の視点と教師のメンタルヘルスの向上

「教科担任制度」を導入することで，教師の専門性を生かした授業ができるとともに，教材研究や授業準備を専科の授業のみに行えるという良さがあると考えます。この形になれば，授業準備にかける時間が，全教科の準備する時間と比較すると短縮が可能になるのではないかと考えます。その短縮できた時間を子どもに向き合う時間にあてることができるのではないでしょうか。

また，教師のメンタルヘルスにも効果がある場合があると考えます。教師と子どもの関係性が良好な時は，学級での１日の時間はあっという間に過ぎます。一方で教師と子どもの関係に問題がある時は，教師にとって苦しい時間になっていくと考えられます。何より子どもたちも苦しそうに見えます。しかし，学級担任である以上，学級で一日を過ごしていきます。その日々を繰り返していくことで，心のバランスを崩す高学年の担任を何人か見てきました。もしかすると,「教科担任制」を導入することで，教師も子ども気持ちを入れ替えていくことが可能になり，子どもの笑顔が増えるとともに，心を病む教師が少しでも減らすことができるのではないかと考えます。

３　「教科担任制」を導入する上で考えられる課題

（１）綿密と情報共有と共通理解の必要性

「教科担任制」を導入することで，質の高い授業展開が行われる一方で，これまで学級担任としての学級経営の充実や一人一人の確かな児童理解に影響が出る可能性が考えられます。そうならないためにも，授業の進め方の共通理解や児童の様子の情報共有等，学校組織や学年体制で学校教育を推進していくということがより一層重要になってくると考えます。

また，教科横断的なカリキュラムマネジメントの実現に向けても配慮が必要であると考えます。「学級担任制」であれば，複数教科を学級担任一人でマネジメントしやすかったですが,「教科担任制」では複数の教員と連携を図る必要があります。どのように連携を図るのかは，学校でしっかりと計画していくことが必須であると考えます。

（２）教師の資質向上

教師の資質向上は,「教科担任制」に限らず常に重要なことであるとは認識しています。しかし,「教科担任制」を導入する理由の一つとして，専門的な質の高い授業展開をするということから，専門的な授業展開に向けた教師の資質向上は重要な内容であると考えます。専科教科を受け持つ，教師の研修方法やシステム等も考えていく必要があると考えます。

（３）専科教員の確保

この内容は，学校の教師が解決できる内容ではないと理解していますが，重要な課題であると考えています。「教科担任制」を導入するためには，専門的な知識をもった教師が必要であるとともに，教師の人数の増員が必要になってくるのではないかと考えます。しかし，現在の教員採用試験の合格倍率は年々低下していることが問題となっています。教師の確保が必要であるのに，教師を希望する人数が減少しています。これは大きな問題であると考えます。

このような問題を解決するために私たち現役教師ができることは，教師という職業を魅力あるものにしていくことであると考えます。今一度，「教師のやりがい」や学校教育に携わる意味を見つめ直す必要性を感じています。

４　おわりに

今回小学校の「教科担任制」について考えを巡らせる機会をいただきましたが，私は「学級担任制」を否定する気は全くありません。「学級担任制」によって大きく成長できた子どもたちは多くいたと考えますし，確かな児童理解の目をもてるようになった教師も多く存在していると考えます。文部科学省も「学級担任制」の良さを認識しているため，低学年と中学年は「学級担任制」を継続するのだと考えます。

一方で，高学年において「教科担任制」を導入することで教育の可能性が広がるのではないかと考えています。子どもたちが専門的な知識を身に付けることができたり，円滑に中学生活に馴染むことができたりすることで，児童が今までよりもさらに大きく成長できるかもしれません。

小学校教師にとっては「教科担任制」の導入を大きな変化だと感じられる方も少なからずいらっしゃると思います。物事を変化させるということは，勇気がいることで，時には大きな負担になることがあります。しかし変化がなければ，何事も変わりません。そして，大きな変化は大きなチャンスにもなり得ると思います。

私は日々学び続け，教師として子どもたちの成長のために，大きな変化を大きな成果につなげられるように，変化を楽しみながらチャレンジしていく教師でありたいと決意しています。